様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３４４１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０３７４

研究課題名（和文）アラン・ロブ＝グリエの後期作品の研究

研究課題名（英文）Study in Alain Robbe-Grillet's works in his later years

研究代表者
奥　純（OKU, JUN）

関西大学・文学部・教授

研究者番号：００１５２４１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究においては、ロブ＝グリエの中期から後期に至る作品の語り構造の変遷と物語の舞台の現地調査で得られた知見を踏まえて後期を代表する自伝的作品の構成を分析した結果、ロブ＝グリエにとって、自我とは統一的に実在するものではなく、謎を孕んだ人生の様々な記憶によって常に更新されてゆくものであり、この自我のあり方こそ、ロブ＝グリエがデビュー作以来、作品創造を通じて一貫して主張し続けてきた、多文化共生の世界を生きる為に必要な人間の自我のイメージであることを明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：I have studied Alain Robbe-Grillet's works in his later years. By analyzing the meaning of the narrative system in his works and doing fieldwork on the cities where his stories were set, I have found that, Robbe-Grillet must have thought that the ego is not really egists, but always changes and updates by memories of life which has always an enigma. Robbe-Grillet also must have thought that such form of ego was indispensable to cultural symbiotic relationship, and he has expressed that throughout all his works.

研究分野：現代フランス文学

キーワード：ロブ＝グリエ　後期作品　自伝　物語論

１．研究開始当初の背景

かつて、私は、それまで体系的な研究がなかったロブ＝グリエの諸作品を、作品創造の発展の軌跡として捉える試みを行い、まず、中期までの作品を小説の脱構築の軌跡として記述することができた（拙著：『アラン・ロブ＝グリエの小説』、関西大学出版部、2000年）が、それ以後、世界中でロブ＝グリエの研究は停滞してしまい、また、私自身も中期以降の作品に分析を進めることができなくなっていた。当時、私が突き当たっていた問題は、ロブ＝グリエの作品に見られる語りの構造をどのように脱構築してもその最後に作品全体を語る作者の声が残ってしまい、これをどのように処理すれば良いかわからないということであった。つまり、ロブ=グリエ研究は、語りの分析を通じて、個人の意識の実在性というヨーロッパ文明の根源的な問題に突き当たっていたのである。

そこで、問題は、ジャック・デリダなどが提唱するヨーロッパ文明の根源に対する批判につながるものなので、ロブ=グリエの作品を小説形式の脱構築のプロセスという側面のみを見るのではなく、その背景を考慮して研究の範囲を文化論的問題に広げ、2010年から 3 年間、科研費の補助（課題番号22520341）を受けて、多文化共生に関わるエグゾチスムの概念を援用してロブ=グリエの初期から中期に至る作品群を読み直し、後期作品の研究に進む手がかりを得る試みを行った。その結果、作品構成の変遷の裏にはロブ＝グリエの独特な世界観の展開があり、その世界観は作品の語りの構造の変遷に顕著に現れていることがわかった。そして、後期の作品に用いられている瓦葺き状の特異な語りの構造の意味を理解することによって、後期の諸作品の創作意図を解明できることがわかったので、本研究課題に取り組むこととしたのである。

２．研究の目的

研究目的は、20 世紀後半のフランス文学史に大きな足跡を残したヌーヴォーロマンの代表的作家アラン・ロブ＝グリエの後期作品の構成とその意味についての研究を行い、ロブ＝グリエの作家としての全体像を捉える事であった。

私は、2010 年度に基盤研究(C)に採択された「アラン・ロブ＝グリエにおけるエグゾチスムス(課題番号 22520341)」において、多文化共生を志向するセガレンが提唱したエグゾチスムの観念をもとにロブ＝グリエの初期から中期にかけての諸作品を読み直し、ロブ＝グリエが、ヨーロッパ文明の専一的な優位性に対する批判と、地域文化を尊重し、異質で多様な文化が存在することに喜びを感じるような、多文化共生を推進する世界観を、作品の語りの構成の中に表現していることを明らかにした。そして、この解釈に基づいて後期作品に属する小説『ジン』(1981)の作品構成を試験的に分析した結果、そこに、新しい語り手が次々に現れては前の語り手が語った物語を消化吸収して新しく発展させてゆくという、いわばカニバリスムのような語りの展開を見ることができた。このような独特な語りの構造は、後期作品群の構成とその意味を理解する大きな手がかりとなるものである。

実際、世界が多様性を前提とするものであるなら、その世界を見る自我もまた統一性を持った単一の存在であり続けることはできず、多様性を前提とする形をとらざるを得ない。そういう新しい自我の形を検証するためにロブ＝グリエは一連の自伝的作品を書いたと思われるし、さらに、新しい世界像と新しい自我像とを総合するビジョンの表現を目指して、後期作品に到るまで生涯を通して多くの作品を書いてきたのだと思われる。このことを、本研究を通して明らかにしようとした。

３．研究の方法

ロブ＝グリエの後期作品群は大きく、1)デビュー作から継続して発展してきた小説や映画などの一連の物語作品の系譜に属する作品群、2)『戻ってきた鏡』(1985)をはじめとする自伝的な作品群「ロマネスク三部作」（以下「三部作」と呼ぶ）、3)最晩年の作品『反復』(2001)の三つのブロックに分けることができるが、中心となるのは「三部作」である。この「三部作」の構造と意味を理解するために 1）の作品群を分析して創作に至った経緯を理解する必要があるし、また「三部作」を書いた意図が理解できれば、3）の意味を考えることができる。この作業を通じて、ロブ＝グリエが作品創作に携わってきたその意図を明らかにし、ロブ＝グリエの作家としての全体像を把握する。

研究方法は、具体的には次のとおりである。1）に関しては、私が 30 年あまりにわたって続けてきた研究の集積があるが、それに加えて、後期作品に見られる特異な語りの構造の文学史的な意味を考察し、さらに、作品の物語の舞台となった都市の実地調査も踏まえて、「三部作」の構成とその意味を理解する準備を整える。2）の「三部作」の分析は本研究の中心をなす部分であり、「三部作」の 1 作目の『戻ってくる鏡』については文学における自伝というジャンルの問題を通して、2 作目の『アンジェリックまたは蠱惑』については、自伝の対極としての虚構を構成する問題を巡って、それぞれの作品構成の意味を考察することを通じてロブ＝グリエが「三部作」を創作した意図を考察し、3 作目の『コラント最後の日々』を含めた「三部作」全体の創作意図とロブ＝グリエの最後の作品となった『反復』を理解する手がかりを得る。

４．研究成果

今回の研究においてはアラン・ロブ＝グリエの後期の、1981 年に発表された小説『ジン』以降の作品、特に後期の代表作であるロマネスク三部作の構成とその意味を解明する試

みを行ったが、その成果は次の 3 点に要約できる。1）後期作品に見られる瓦葺き状の語りの構成は、自我とは実在するものではなく、常に謎をはらみながら日々更新されてゆくものであるとするロブ＝グリエの思想を表現したものである。2）ロブ＝グリエの作品は彼の生活経験を、物語内容のレベルを超えて作品構成のレベルに至るまで、高度に抽象化して表現したものである。3）以上の 2 点の知見を元にロマネスク三部作を分析すれば、この作品は、真実の自伝と純然たる虚構という実在し得ない二つの極限の間に存在し常に書き換えられては自らを更新してゆく物語空間を表現したものであり、それこそが、ロブ＝グリエが一貫して表現しようとしてきた人間本来の自我のあり方である考えられる。

具体的に述べれば、１）については、作品構成における多元焦点化の問題を、ロブ＝グリエの作品に先行するジャン＝ポール・サルトルの小説『自由への道』（1949）とミシェル・ビュトールの小説『段階』（1960）の作品構成について検討した結果、ロブ＝グリエが後期作品に特有の瓦ぶき状の語りの構造を使用したのは決して突然の思いつきではなく、個人の意識による世界の全体像の把握が次第に不可能なものであると認識されてゆく文学史の歴史的展開の過程に沿ったものであることが理解できた。２）については、後期作品のとば口となる 1970 年に発表された『ニューヨーク革命計画』に描かれた物語世界をニューヨク市街の実地調査を踏まえて検証し、また後期の自伝的作品『戻ってくる鏡』に描かれた物語世界を、ロブ＝グリエが幼少期を過ごしたブレスト市街の実地調査を踏まえて検証した結果、作品に描かれた物語世界は、ロブ＝グリエの記憶に強く残ったイメージを数少ない事実を元に極度に抽象化して表現したものであることが理解できた。そして３）については、後期の中心となるロマネスク三部作を１）と２）で得られた知見を踏まえて分析した結果、１作目の『戻ってくる鏡』は、フィリップ・ルジュンヌの主張する [1]ような「あるがままの人生」の実在性を前提とした伝統的な形の自伝ではなく、自伝的記憶が常に新しい物語として語り継がれるものであることを描いた作品であり、また、２作目の『アンジェリックまたは蠱惑』は、１作目とは全く逆の立ち位置にあって、純然たる虚構の世界などというものもまた実在せず、人が語る物語世界の奥には必ず実際の経験が痕跡として潜んでいることを描いたものであることがわかった。つまり、ロブ＝グリエにとって人生の記憶とは実在と虚構の中間地帯にあって、日々新しく更新されてゆくものなのであるが、そうであれば、その人生を記憶している主体もまた統一性を持って実在するものではなく、日々新しく更新されてゆくものでなければならない。このような更新されてゆく自我のイメージこそ、三部作の３作目『コラント最後の日々』と最晩年の作品『反復』の創作意図を理解する鍵となるイメージであることを明らかにすることができたのである。

＜参照文献＞

1)Philippe Lejeune: *Le pacte autobiographique*, Seuil, 1975

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

①奥　純、「アラン・ロブ＝グリエの後期作品の研究(3)ー『アンジェリックまたは蠱惑』と虚構空間ー」、関西大学フランス語フランス文学会『仏語仏文学』、査読有、第 43 号、2017 年、1-20

②奥　純、「アラン・ロブ＝グリエの後期作品の研究(2)ー『戻ってくる鏡』と自伝空間ー」、関西大学文学会『関西大学文学論集』、査読無、第 66 巻第３号、2016、25-49

③奥　純、「『ニューヨーク革命計画』とニューヨーク」、関西大学フランス語フランス文学会『仏語仏文学』、査読有、第 42 号、2016、1-24

④奥　純、「アラン・ロブ＝グリエの後期作品の研究(1)ー瓦葺き状の語りの構成とその意味についてー」、関西大学フランス語フランス文学会『仏語仏文学』、査読有、第 41 号、2015、11-36

〔学会発表〕（計 3 件）

①奥　純、「アラン・ロブ＝グリエのロマネスク 3 部作について(1)、関西大学フランス語フランス文学会、2016 年 12 月 17 日、関西大学（大阪）

②奥　純、「『ニューヨーク革命計画』とニューヨーク」、関西大学フランス語フランス文学会、2015 年 12 月 19 日、関西大学（大阪）

③奥　純、「『ジン』の語りの構成について(2)ー多元焦点化の物語を巡ってー、関西大学フランス語フランス文学会、2014 年 12 月 20 日、関西大学（大阪）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
奥　純（OKU, Jun）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：00152413

(2)研究分担者
なし
(3)連携研究者
なし
(4)研究協力者
なし